

通史：半世紀のあゆみ
青春のパライストラ
ひたすら臥薪嘗胆

編 集 部

1. 伴監督発進

ひたすら臥薪嘗胆の「時」が流れることになる。「30周年記念誌」には、昭和48年度から51年度までの間の記録を、伴義孝が「不死鳥の飛翔を願って」と題して報告している。その一部は既に前章に引用しておいた。この章では、「2・新生」と節題をつけた後半部分からその要素の大方を引用しておきたい。

伴義孝が、まず、監督を引き受けることになった経緯を次のように語っている。

堀江監督が、仕事のご都合で、昭和47年度をもって退任された。その後任に私が推されて昭和48年度より監督に就任した。当時私は33歳であって、その年齢「33」を換って「3 + 3 = 6」、つまり「カブ」遊びにいう「6」は勝負どころということで、いささか不真面目ではあるのだが、私の職業（母校の体育教員）のほうもこころが勝負時と、そろそろ観念をきめていたときだけに、この大役を役者不足と自覚しながらもお引き受けすることとなった。大学紛争を契機に、新しい大学スポーツのあり方をいろいろ模

索しはじめたときであるので、レスリングについても、関大における学生スポーツとしての新境地の開拓が必要であるのならば、その方向に進むことを前提にして取り組むことになったのである。しかし決心するまでには、堀江前監督、光富元コーチ、故村山コーチなどに新方向を模索することを十分に相談した。「私のやり方で目鼻がつくまでやる」ことを了解してもらいそれに勇気づけられての出発となったのである。

（伴手記「30周年記念誌」）

以下にも、他からの引用と併せて、多くを伴義孝手記「30周年誌」から引用しておく。

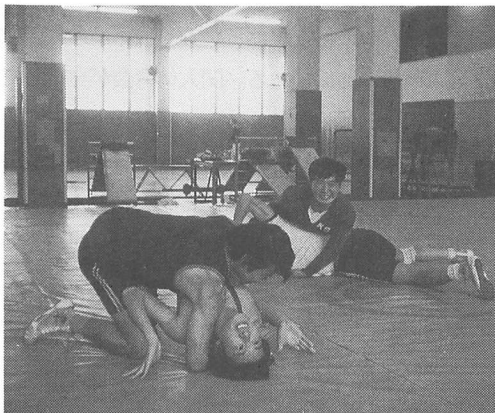
2. 昭和48年（1973）・ゼロから

風俗・流行・歌 オイルショック・買いだめパニック／ユックリズム／♪『夜空』

春のリーグ戦は、「……2部では、名門関学をトップに広島修道大、名城大、新人の加入で、補強された名商大で優勝が争われるだろう。名門関

大は4名のレギュラーを送り出し、選手層の薄さで今シーズンは大きな期待がもてない」と見られていた。これに対して、関大は「全員一団となって再建のため頑張る。今リーグ戦はベストをつくすと同時に今後の足掛かりのための船出と思う。一念発起。」と、私の胸中を秘めて臨んだのである。結果は4位。出場するメンバーの不足分の構成は、柔道部と拳法部より調達したのであった。

ともかく「ゼロからの出発」だ。過去のプライドが選手を縛るようでは困る。選手に、2部で、初歩からレスリングを学ぶことを要求する。こうして、春の練習の苦い経験（合宿初日、たった4名の「虎の子レスラー」たちはひとりも姿を見せなかった。彼らは密かに退部を考えていたのである。その経緯は「青春のパライストラ1973」に詳述してある。）を参考にしながら、夏へ向けて合宿までの練習を行った。夏の合宿は、チームワークと基礎体力を養成することに主眼をおいた。



写真▷昭和48年当時「頑張ってます」



今、一番印象に残っているのは、やはりこの夏の合宿だろう。

合宿場所は神戸にある監督の家、練習場所はその付近の山々、そして兵庫県でレスリング・ナンバーワンの高校の体育館。練習相手はその高校

生、しごく人は、我々の監督、その高校のコーチ、そして関大のOB。練習のスケジュールは、朝のランニングと午後のスパリングである。今、自分の書いている指が震えている。どうにも止まらない。この夏の練習を思い出すだけでこういう現象が起こるのである。とにかくあの高校のコーチの顔を思い出すだけで身の毛がよだつ。部員全員がそういう状態に陥ることは火を見るより明らかだ。

しかしどうしてこんな場所で、合宿をしなければならなかったか。この原因の一つは4回生がいないということ、今一つクラブのまとまりを欠いていること。そして第2に、合宿所の近くに、マットすなわち体育館が必要であるということ。まったく因果なクラブである。

合宿に入る前は、高校生が相手なら、というので比較的気が軽かったが、これがそもそも誤りで、あの高校生の強かったこと。（自分たちが弱すぎたのか?）。それはまだ良いとしても、あのコーチはまさしく鬼であった。いや、むしろ、あの恐ろしさは表現不可能というべきだろう。五体満足な者も日増しに減り、ついには失踪する者も出る始末。ただひとつ、我々に光を与えてくれたものがある。それは後半から食事を手伝いに来てくれたマネージャー（女性）の存在であった。（焼け石に水という声もあったが。）

しかし今考えるに、それが厳しいほど、無事終えたときの征服感、充実感というもの強くなり、自分に自信がつくように思われる。これはやはりやり遂げない者にとっては、絶対わからないことであり、それゆえ非常に貴重な経験だと思う。しかし次の合宿を考えると、心が暗くなるのは、どういうわけだろうか。（『関大体育会誌』）



この夏の合宿の成果は、秋のリーグ戦の成果としてはまだ現れなかった（秋季2部4位）が、少

数ではあるがそれらの部員のレスリングに取り組み構えが少しずつ上向いていくのが、(秋までに主将が片野に変わるということがあったが)、手に取るようにわかった。この年が終わるころの部員の意識は次のように固まりつつあった。これは当時の部員が記したものである。



レスリングというスポーツは、まだまだ大衆に理解されていない面が多くある。そこに我々の苦悩の諸原因があるのだが、学生間においてさえマスメディアによる曲解した固定概念が根深く浸透している。だが、体育会全体の後退現象の最中であって、この風潮だけが、我がレスリング部の部員減少に起因しているのではないということが理解しえるであろう。今後こういう要因に対して、いかに対処するかがクラブ再興のカギとなる。

それゆえレスリングというものが、いかに我々にとって身近であり、やりやすいスポーツであるかを述べなければならない。レスリングというものは決して野蛮なものではなく、他の格闘競技よりはるかに危険性が少なく、理論的かつ思案を要するものであることは、明らかである。またレスリングは体重によってクラスが分けられているので、その点においても万人向きである。その上身体における筋肉作用を、すべて必要とするので、成長過程にある我々にとってこれ以上のものはないであろう。

そして自分の体をよく知り、それに合った技を研究し、身につけるという思考を繰り返すことによって、肉体的のみならず、精神的にも学ぶところが多くある。相手に勝てる技というものは決して不特定要因による偶発的なものではないからである。レスリングをやっている者にとって、最も緊張するときは、やはりマットの上に対戦者と並んで立ったときである。特にこれはリーグ戦ともなると、この緊張感は想像を絶する。とにかく自

分の味方は自分自身だけである。しかしいったん試合が始まると、不思議に消える。まさに無私の境地である。そして自分の得意技がかかったとき、またそれ以上に、相手をフォールしたときの醍醐味は何にも例えられないものである。(『関大体育会誌』)



この春、宮内ほか数名の1回生が入部したが、残ったのは彼ひとりだけだった。夏休みあけの9月に岩本、奥井の2名が入部し、1回生は計3名になった。

3. 昭和49年(1974)・部員増作戦

風俗・流行・歌 田中金脈問題／超能力
・ストーリーキング／♪『襟裳岬』

私が監督に就任して最大の難関を昨年切り抜けて、ひとつの目安がたった。この年の最大の目標は、部員の獲得である。関大体育会が発行している新入生向けのPRニュースに、「ご入学おめでとうございます。関西大学体育会は傘下に45のクラブを有しており、全クラブとも、諸君とともに、より高い人間形成を目指すために、ただいま新入部員を大募集いたしております」とキャンペーンを行った。それには、レスリング部は、次のように呼びかけている。



レスリングはその起源をたどってみても、また現代においても、最も地味でゴマカシのきかないスポーツのひとつです。だからこそ古代ギリシア時代より、人びとは身心を鍛える場として、レスリングを愛してきたのです。こうしたたゆまない努力のみが開花する場で、自分を見つめていくことは、我々学生にとって、本当に大切なことではな

いでしょうか。

30年の歴史を有し、過去には世界的・日本の名選手を輩出してきた我が部も、現在では、地味でゴマカシのきかないスポーツを敬遠するという近年の風潮を反映して、部員の激減をきたし、そのため西日本リーグの2部校に甘んじております。しかしこれは真の姿ではなく、この過渡期に、しっかり土台作りをと邁進しております。

我々には自信があります。なぜなら、未経験者が大学より始めても、まじめにコツコツ努力すれば必ず大成することを過去の事例に見てきているからです。しかし君達の「力」が必要です。レスリングは48キロ級から100キロ以上級までの10階級のウエイト制です。体格の大小を問いません。体力つくりのために参加したい学生も歓迎です。練習は「体育館・第2体育室」で行っていますので、是非参加してください。学業と両立させ、自己を地道に鍛えたい人、きたれ！

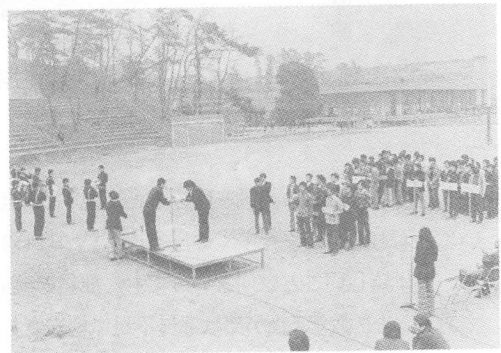


春のリーグ戦は、片野主将、飯田副将、岡田主務のもとに「少人数ながら抜群のチームワークで全力を尽くす」との抱負のとおり、2部の第2位へと上昇したのである。リーグ戦をおえる頃までには1回生も南口、大西（司人）、大西（浅人）、岡原と有望新人が集まっていた。

……夏が終わって、片野が来年度イギリスに留学するというので主将を辞退した。かわって飯田が主将、副将に宮内（3回生）がそれぞれ後任を引き受けることになった。

秋季リーグ戦では、この春のリーグ戦のメンバー交換に出席しなかった近畿大学が自動的に2部転落したため2部リーグへ出場した。当時近大は1部において優勝を狙えるメンバーを揃えていたので、断然強く全勝で優勝した。また春2部リーグの名城大も、ともに同メンバー交換に出席せず自動的に出場停止になっていたのであるが、最強

のメンバーを揃えていただけに、秋のリーグ戦ではやはり強かった。これらのチームに後塵を拝して、関西大学は、3位に終わったのである。しかし、昨年来、最も手応えのあったリーグ戦で、このころより、関大は、密かに2部リーグ優勝を狙いだしていたのである。

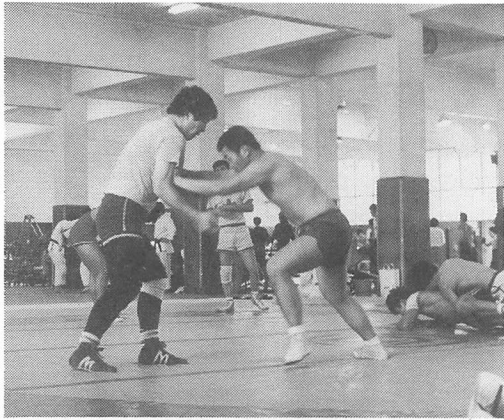


写真▷当時の関大「スポーツ週間表彰式」

4. 昭和50年（1975）・2部初優勝

風俗・流行・歌 複合汚染・サラ金／千
円亭主／♪『およげ！たいやきくん』

やっと陣容も落ちついて、主将飯田、副将宮内、主務岡田と昨年の後半より持ち越して、この年は、幕を開けた。この春、片野が抜けて軽量級に穴があいたが、「若手のチームであるが、2回生が頑張れば、優勝も可能なチームである」との評判どおり、中、重量級が活躍して全勝して2部初優勝を飾った。入替え戦には惜しくも中京大学に「6対3」で敗れたが、「力」のついてきたことが自信に結びついてきた。同時に反省点を部員が自覚するようにさえ成長を見せてくれた。



写真▷ 2部優勝に向けて張り切ってます

本年度の我が部の活動を顧みると、色々と嬉しいこともあるし、また多くの反省点も見つけられる。まず嬉しいことは何といっても、部員の充実である。ここ数年、我が部は部員不足に悩まされ、ひいては戦力不足として、リーグ戦などにおいて、苦しい戦いを強いられてきた。しかし本年度は久しぶりに部員数が10名を越え、全学年とも、欠けることなく部員が存在するという大変嬉しい年となった。やはり部員が増えると、自然と練習にも力が入り、活気のあるトレーニングやスパリングが行えるようになる。このうえない喜びである。

かつては西日本学生レスリングの王者として、華々しくその名を轟かせていた我が部も、3年前、突如として2部落ちという悲しい現実にはブチ当たり、以後、低迷を続けていた。過去の戦歴が輝かしいだけに、このまま我が部を衰退させてしまうことが残念でならないと思ったのは、私だけではあるまい。我が部の大先輩であり、かつ現在、監督をなさっておられる伴先生が、そうであるように、部員全員が何とかしなければと思っていたに違いない。そしてその信念が突ってか、2部落ち以来、ちょうど3年目に春のリーグ戦には、かつてない部員数で戦いに臨むことができたのである。しかしながら、実はそのリーグ戦も、せっか

く下級生部員が充実しながら、肝心の4回生が、手首骨折で出場不可能になったり、あるいは、学連関係の仕事で練習不足になったりして、戦力としては決して最高の状態ではなかったのである。

ところがやはり部員の充実とは、素晴らしいもので、いざ戦いが始まると、我が部は白星街道を突っ走り、リーグ戦終了時には、「優勝」という2文字が、我が部の上に輝いたのである。我が部の低迷時において、まず当面の目標であった「2部優勝」ということが、これほど早く、しかも私の在学中に果たせるとは、正直いって、予想していなかった。それだけに感激もひとしおである。しかも私が嬉しかったのは、そういう下級生部員には、高校時代のレスリング経験者が、1人もいかなかったことである。彼らはみんな大学に入ってから始めた者ばかりである。その彼らが努力して勝ち取った栄冠であるだけに、私は意義深いものであると思うのである。

しかし我が部には大きな反省点も存在することを忘れてはならない。まずこの程度のもので満足してはいけないのである。この「2部初優勝」ということが、少なからず部員の気を弛ませたことを、認めざるをえない。その結果がその後の練習の雰囲気にも表れ、ひいては、合宿も当初の予定どおりに運ばないという事態を招いてしまったのである。これは大いに反省しなければならない点である。「2部優勝」はあくまで我々の目標のワンステップにすぎない。西日本の王者に返り咲くために通る最初の「駅」にすぎないのである。目的の終着駅は、まだまだ、先にある。ここで気を弛めて機関車をストップさせたのでは、今まで通過した駅はまったく無意味となるだろう。新関大号は、今、大きな汽笛とともに走りはじめたばかりである。そして必ず終着駅にまで息切れすることなく走り抜いてくれることと、私は信ずる。数年ぶりに、関西の新人チャンピオンを誕生させ、

学生選手権においてメダリストを出した我がレスリング部であるから……。果て尽きることなく、不死鳥のように、再び華々しく舞い上がるはずである。（『関大体育会誌』）



秋には再び2部優勝を6戦全胜で成し、入れ替え戦においても、中京大を「1点差」で倒し、昭和47年以来、念願の一部復帰を果たすことができた。しかし私の胸中では、この入れ替え戦でむしろ「敗れて」、2部でもう数シーズン実力を蓄えるほうが、将来的に、1部での安定性を確保できると予見していたのであった。この胸中は、押立理事長（関大OB）にも密かに明かしておいた。だが実力では数段優る中京大学が負傷者を続出させて、勝利の女神は、我が部に味方していた。

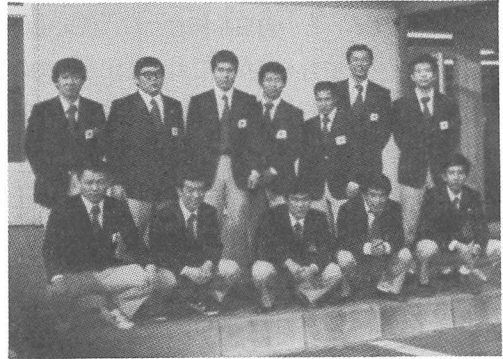
この春、新人には、片岡、西川、宮田などの重量級が入部し順調に実力をつけていった。この年より個人戦においても活躍するようになって、西日本学生選手権大会において、久方ぶりにグレコの68キロ級の岩本が3位に入賞した。また西日本学生新人選手権大会では、フリーの48キロ級で大西司人がこれまた久々に新人王に輝いた。

5. 昭和51年（1976）・地力がつく

風俗・流行・歌 偏差値・灰色高官／ベルバラ・ジョギング／♪『北の宿から』

3月、西日本学生レスリング連盟は、連盟行事として「対カナダ」との国際交流を始めた。この年、関大の宮内（74キロ級）と宮田（82キロ級）の2選手がこの遠征代表に参加した。これも久方ぶりの海外遠征代表選手の出現である。部員に励みと目標を身近に感じさせる良い刺激材料となった。この春のリーグ戦より、階級制が、48キロ1

名、52キロ1名、57キロ1名、62キロ2名、68キロ1名、74キロ1名、82キロ1名、+82キロ1名の8階級9人制に変わった。



写真▷「カナダ遠征」の宮内さんと宮田さん
（宮内＝後列左端・宮田＝後列右から2人目）

この春は、宮内主将、奥井副将、岩本主務のもとに1部で実力を試すことと、「チームワークを武器に1部上位を目指す」ことを目標においてリーグ戦に臨んだ。結果は、福岡⑦-2関大、大体大⑧-1関大、近大⑦-2関大、同大⑨-0関大、桃山大⑥-3関大、で全敗して最下位になったのだが、少数の選手は1部においても既に実力が接近していることが判った。続く入れ替え戦においては、残念ながら、関学に1点差で敗れて、またもや2部へ逆もどりということになった。中量級に選手を欠いていたことが命取りではあった。だがこうして1部の「力」を身につけていくことができると、ある意味においては、そんなに落胆することもなかった。

秋は再び2部で6戦全胜で優勝。入れ替え戦では桃山学院大学に「6対3」で敗れはしたものの、地力がついてきた。この壁を乗り越えてこそ、リーグ戦での、安定性が少しずつ培われるであろう。入れ替え戦に敗れたとはいえ、当日応援のために集まってくれたOB諸氏が、「2部優勝」の祝賀会を開催してくれた。ここに関西大学レスリング

部の良き伝統とOB諸氏の暖かい援助を感じて、部員たちは、決意を新たにしてくれたのである。

この年、国体で、グレコの48キロ級に大西司人が第3位に入賞した。これは、「コツコツやれば、必ず開花する」との自負を部員たちに伝える絶好のメッセージでもあった。これこそがかつての関大の「底力」であったのである。西日本学生新人選手権大会には、グレコで74キロ級の西川が新人王に、また82キロ級のフリーでは宮田が新人王になるなど着々と成果が表れてきている。

6. 不死鳥の飛翔を願って

……現在の学生を見ていると、「あれもしたい、これもしたい」という対象が多すぎて、一見、羨ましくも思うこともある。しかし実をいえば、賢明に選択しきれずにいる彼らを見て、同情している次第でもある。何か目新しいことをするために、現在行っていることを簡単に放り出してしまう八方美人が大勢いる。当世風というのか、それもあまりにも諦めがいいので戸惑ってしまう。聴けば、それ相当の理由もちゃんと用意してはいる。そういう学生をよく観察していると、充分な計画と決意(?)をしているはずなのに、またもや簡単に訣別するのである。

こうした学生がレスリングの門をたたき、幾人かが去って行った。残った学生は一見平凡にはみえはしたが、彼らが卒業するときには「自分」をもって社会に出て行った。最近やっと世の中が落ちついてきたようだ。学生は何か「しっかりしたもの」を身につけたいと願っている。そうした空気がレスリング部の部員を見ていると伝わってくる。やっと我が部にも「自発性」ができてきた。これより再び不死鳥の飛翔が、「真理の探究、学の実化」を求めて、続いてくれるだろう。

最後に、先輩諸氏から授かった、数ある薫陶の

なかからその一端を記しておいて、「関大レスリング部」の発展の糧に供しておきたい。

▷ 私(伴)が1回生のとき、故安川先輩が、練習にこられた。新人を集めて「心の持ち方」について、ご本人の体験談を話してくれた。

「昭和25年の春のリーグ戦で、鎖骨の骨折をおして試合に出場し、関大を優勝に導いた。気力があればできる」と。

▷ 後年、東京五輪で市口先輩は、足首の捻挫を克服して優勝している。メキシコ五輪ではフリーのバンタム級で上武選手(オレゴン大出)が肩の脱臼にもめげずに優勝をものにした。私自身(伴)についていえば、右膝の内側靭帯と十字靭帯の一部を、昭和37年度の国体会場の練習場で、切断してしまった。競技生活において致命傷ではあったが、「気力があればできる」ことに勇を鼓されてどうにか今日までレスリングに携わることができた。

▷ 「コップ一杯の水」を説いたのは、西脇先輩であった。当時彼は我々のコーチで、「コップ一杯の水の味はいろいろに変わる。普段のむ水、試合に勝って喉を癒す水、減量中の水……。それぞれの価値がある。たかがコップ一杯の水に」とレスリングを通して真理を探究する努力の貴重さを教えてくれた。「内なる探究」、ここにはビートにのって踊りだすような変化と手軽な面白味はないが、学生の求めるべき姿がある。

▷ 2回生のときはローマ五輪の年だった。最終予選会に市口先輩が出場して優勝し代表になった。予選は5日間にわたる長丁場の試合であったことと、代表を目指す緊張が普段は減量に苦む彼に、逆に57kgを容易に維持させることになっていた。私(伴)は、彼の応援と世話をかねて、ただひとり随行していた。

ある日、疲れを癒そうということで、「甘いもの」を食べることにした。それはかなり厚手のゴム風船に入ったゴルフ玉ぐらいの「水羊羹」であった。これを2人でいくつかたいらげたのである。ひとつ、ふたつと食べるうちに、彼はテーブルのうえの「爪楊枝」でゴム風船をつつき破いて、簡単に中身を取り出す方法を発見した。それまでは2人して、ゴム風船の「口」を固く結んだゴム紐を丁寧に解いて、中身を取り出していたのである。この何の変哲もない「発見」にも結びつく彼の研究熱心さと着眼点の鋭さが、のちに市口先輩をして、オリンピックのゴールドメダリストに自らを育て上げたのだらうと確信している。身近なところに、いくらでも真剣に取り組むべき材料は転がっている。チョットの違いが大きな結果を生む。そう、市口先輩は無言で教えてくれたのではないか。

- ▷ 指導者の立場にたって、その責任の大きさを教えてくれたのは、押立先輩である。彼が西日本学生レスリング連盟の理事長になって以来の指導は、どれひとつとってみても敬服

せずにはいられない。そこにはレスリングを愛する真摯な姿があって、常に指導者としての責任の重大さをいかに果たすかということなど、その手本を見せてくれているようだ。

- ▷ コツコツ地味ではあるが、「誠実」が指導者にとって、貴重であることを教えてくれたのは佐々木先輩である。指導者はまわりの雑音に振り回されるようではいけない。確固たる展望のもとに一步一步進むべきである。これを、身をもって教えてくれた。佐々木先輩は、昭和52年、大阪体育協会より、その指導者ぶりに対して、功労賞を贈られて表彰されている。

まだまだ薫陶を受けている。こうした経験が「青年」を大きく育ててくれるのであろう。大学スポーツは、こうあるべきだと、昨今とみにそう思える。インフォーマルな教育の場。しかも、スポーツを通じての、これが、日本の、学生スポーツの一大特色ではあるのだ。こうした場を、レスリングを通じて、醸成していきたい。(伴義孝手記「30周年記念誌」に加筆) (完)



写真▷昭和46年「国庫助成促進署名運動」・関大正門

戦後、大学進学率の増加は目ざましく、昭和50年には38パーセントに達し、大学生の総数は200万人を突破したが、その7割5分が私立大学に学ぶ。しかるに政府は長らく私大助成の責務を回避してきた。文教政策の貧困というほかない。その上、高度成長に伴う物価、人件費の急騰は私学経営を極度に悪化させ、諸大学の学費値上げが相次いだ。……このような苦悩を深める私大の実情をみて、政府も漸く認識を改め、45年から国庫助成を開始した。(『関西大学百年のあゆみ』より)